

「経験の可能性の制約」から「可能的経験」へ

——カント『純粹理性批判』における演繹論と図式論——

長 田 蔵 人

序

カント自身の言葉にも示されるとおり、『純粹理性批判』の中心課題であるア・プリオリな学の基礎づけにとって最も重要であり、超越論的分析論において基軸となる議論は、カテゴリーの超越論的演繹である⁽¹⁾。たしかに演繹論は、カントが『批判』出版に至るまで十余年もの年月をかけて考え抜き、さらに出版後の数年も考え続けていた問題である。この議論を読む誰もが、カントの苦心と集中的な思索の跡を読み取ることができよう。しかしながら、注がれた労力の大きさや議論そのものの重要性は、必ずしも、著者の論考のどこにへ到達点があるのかを示すとは限らない。

演繹論の課題であるカテゴリーの「客観的実在性」(objektive Realität)の証明は、従来の解釈によれば、ヘカテゴリーがいかにして経験の対象に適用されるかという「適用」(Anwendung)の問題が解決されることによって、最終的に達成される。そしてこの解釈はまた、原理的には演繹論において解決済みである適用問題を、個別のカテゴリーに即して論じていくのが、その後が続く超越論的図式論の課題である、という理解の素地にもなっている。ところがそのような理解こそは、演繹論と「原則の体系」論(「純粹悟性のあらゆる原則の体系」とに挟まれた図式論について、その固有の役割を見出せずにいる解釈者たちの苦境の源である。というのは、図式論に続く「原則の体系」論とは、各カ

テゴリーの「適用」によって展開される規則を個別に基礎づけていく議論であるゆえに、演繹論を適用問題の一般的・原理的解決とみなすならば、図式論については、この両者に対する差別化を可能にするような固有の論点を見出せなくなってしまふからである。つまり、図式論の本質的な意味を見えにくくしているのは、演繹論がカテゴリーの客観的实在性の一般的証明として「完成」された議論であるとする、ほとんど疑問の差し挟まれたことのない理解である。

これに対して本稿が主張するのは、演繹論をどのように何らかの〈到達点〉であるかのようにみなす読み方は、実際には図式論において初めて示されうる論点を演繹論のうちに読み込んでしまうものにはかならない、ということである。長い研究史を踏まえたいうで、いま我々に必要であるのは、演繹論が〈何を成し遂げたのか〉ではなく、〈何を成し遂げてないのか〉という視点からの再考である。そしてそのような視点からの見直しこそが、演繹論そのものの本質理解にとっても、また次に続く図式論の意義の理解にとっても決定的に重要である。つまり、演繹論の使命の本質を理解するには、演繹論において〈為されてないこと〉にこそ注目するべきなのであり、そこから見えてくるのは、演繹論が〈到達点〉ではなく、図式論における「超越論的真理」(transzendente Wahrheit) (A146/B185) の確立という、さらに先に控える課題のための素材の提供、しかも、その根源的・本質的な在り方における提供なのだ、ということである。そうして演繹論において、「経験の可能性の制約」(B161)として根拠づけられたカテゴリーは、それに基づいて図式論が真理性の基礎を形成し、経験的認識の地平を開くことによって初めて、「可能的経験」のうちに「実在化」(realisieren) (A146/B185) されることになる。本稿では、演繹論がそのような意味において図式論の準備であり、図式論の必要性を開示するための議論にはかならないということ、そして図式論は、そこで開示された課題を遂行する議論として読み直されねばならない、ということを明らかにしたい。

一 B版演繹論の二段階構成——従来の解釈とその問題点

カントの問題提起に従うならば、超越論的演繹の問題とは、カテゴリーの「客観的実在性」の問題、すなわち、ア・プリアリな概念としてのカテゴリーがいかにかして客観に関係づけられるのか、という問題である (cf. A85/B117)。そこでこの演繹論の眼目は、「客観」(Objekt) ということの本質(客観性)の考察から、客観をそのようなものとして思惟するための「可能性の制約」として、カテゴリーを導き出すことにある。そしてその急所は、客観性がある種の「必然性」を前提としている、という洞察である。カントによればその必然性とは、直観において与えられた多様な表象が、ア・プリアリな規則(カテゴリー)に従って「統覚の超越論的統一」(B139, A108)のもとにもたらされることに由来する。統覚の超越論的統一、または「自己意識の汎通的同一性」(B135)は、諸表象がア・プリアリな規則に従って総合的に統一されることを通じてのみ可能である (cf. B133, A112)。そして、そのような総合的統一によって、「多様」としか表現しようなない主観的な諸表象からは区別されるべきもの、即ち客観が構成される (cf. B137, A109f.)。

「自己意識の超越論的統一」(B132)がまさに「統一」であるために前提される総合の規則性が、多様な表象の結合のうちに必然性をもたらし、この結合の必然性こそが、客観性の本質を成す。こうして、客観に対する主観的な諸表象の関係そのものが、それらの表象の総合的統一によって形成される。すなわち、客観とはこの統覚の統一の相関者にはかならない。このような根拠から、その統一の規則としてのカテゴリーが客観の「可能性の制約」であることが結論づけられる。

以上が、カントが「客観的演繹」(A XVII-XVII) という名のもとで理解する演繹論の核心部分の趣旨である。しかしこの議論だけでは、超越論的演繹のそもそもの課題、B版の言葉で言えば、「演繹の目的」(Absicht der Deduktion) (B145) が果たされたことにはならない。その課題とは、「我々の感覚に現れうる限りのあらゆるものが、いかにして、悟性だけからア・プリアリに生じた法則「カテゴリー」に従わねばならないか」(B160)、という問題である。B版

の演繹論では、前半部分 (§§ 15~20) において上記のような、統覚の統一に基づく客観性の分析が行われる。カント自身の説明によれば、ここでは、表象が直観に与えられる「仕方」(Art) は度外視されている (B14)。つまり、この段階ではまだ、カテゴリーが適用されるべき直観が、空間・時間を形式とする感性的直観である、ということは考慮されていない。これに対して、後半部分 (§§ 21~26: デーテルの言うところの、「演繹の完成」(Vollendung der Deduktion)) では、カテゴリーと感性的直観とを媒介する構想力が初めて言及され、カテゴリーの客観的実在性が、直観が経験的に与えられる「仕方」の側から説明される (B14f)。カントは、ここで初めて「演繹の目的」が達成される、と考える。

B 版演繹論のこのような二段階構成については、それぞれの段階の意味と関係の問題をヘンリッヒが主題化して注意を引いて以来、盛んに論じられてきた。近年の趨勢では、両段階を区別する基準の理解に違いはあるものの、第二段階がカテゴリーの適用の問題に答える議論として、経験的認識におけるその「例示化」(instantiation) や「実効性」(Wirksamkeit) を具体的に示そうとするものである、という解釈が標準的である⁽³⁾。

それらの解釈はいずれも、当然のことながら、超越論的演繹がへ何を成し遂げたのかという視点からの考察に基づく。そしてそれによれば、演繹論はその仕上げの段階において、経験的認識におけるカテゴリーの客観的実在性に関する「いかにして」問題 („Wie“-Frage) (Baumanns 419) に答えるために、カテゴリーと感性的制約との結合を確立しようとする (cf. Allison 135)。つまり、演繹論はその課題を完遂するために、カテゴリーやその効力が経験的認識において実際にいかにして「現出」(Vorkommen) するかということを示さねばならず (cf. Detel 36)、そのために、構想力を介したカテゴリーと感性的直観との結合の解明を必要としている。多くの解釈者は、B 版演繹論における第二段階の課題を、このような感性的直観に対するカテゴリーの「適用問題」(Anwendungsproblem) (Detel 37) として捉え、その解決によって超越論的演繹は「完成」すると考える。

さて、このような演繹論理解は、カテゴリーの適用問題が実質的には演繹論においてすでに解決されており、図式論

の課題は、その解決を個別のカテゴリに即して提示することである、という図式論解釈に基礎を与えるものである。その結果、カテゴリの客観的実在性を証明してしまった演繹論と、各カテゴリの適用に基づく諸原則の個別的な基礎づけである「原則の体系」論とのあいだに挟まれた図式論に対して、どのような意味づけを与えるかということが、解釈者たちの苦心の種であり続けてきた。⁽⁶⁾このような苦境の原因は、演繹論が超越論的分析論の頂点であり、図式論がその影であるかのように見えてしまう〈錯覚〉にある。つまり、演繹論と図式論の本質的な意味を見誤らせてきたのは、カテゴリの客観的実在性や適用の問題が、演繹論において原理的・一般的には解決されている、とする理解である。このような理解の誤りを明るみに出し、演繹論の本身（使命と限界）を見極めるために、我々は、演繹論が〈何を成し遂げたのか〉ではなく、〈何を成し遂げてないのか〉という視点から、これらの議論を捉え直してみたい。本稿の見通しでは、演繹論とは、適用問題に解決を与えるのではなく、まさに解決が必要とされている問題状況を明らかにする議論であり、これに代えて実際に感性的直観とカテゴリとの結合を超越論的図式において示すのが、図式論の課題である。まず次の節において、本稿の演繹論解釈をB版の議論に即して示し、この議論の論点が図式論の必要性を指し示しているということを明らかにしたい。

二 演繹論の限界——図式論との関係におけるその課題の本質

前述のように、B版演繹論において「構想力」が初めて主題化されるのはその第二段階においてであり（cf. §24 (B151f), §26 (B164)）、また、カテゴリの「適用」という言葉がB版演繹論内部で初めて言及されるのも、この段階においてである（cf. §§23~24 (B148f, B150f, B152)）。したがって、演繹論の後半部がカテゴリと感性的直観との結びつきや適用の問題を問おうとするものであることに間違いはない。しかしながら、演繹論において〈何を成し遂げたのか〉という視点からここでの議論を捉え直してみるならば、従来の標準的解釈が取りこぼしていた新たな問題が見え

てくる。それには二つある。

第一に、演繹論での扱いにおいて感性的直観として本質的な意味を持つのは、受容性の形式という側面であり、超越論的感性論において仕上げられたような「直観」性の側面、すなわち、概念とは異なる特有の〈統一〉と〈全体性〉を本質とする「与えられた一つの無限量」(eine unendliche gegebene Größe) (A25/B39f) という側面(後述)は、ほとんど無視されている。たとえば、B版§26における次の議論を考えてみよう。カントによれば、空間・時間は対象として表象される限りは、単なる「直観の形式」ではなく、「形式的直観」(B160f; Ann.)として直観そのものである。そして、対象として表象されるこの直観が含む統一は、直観形式に適用された構想力の働き、すなわち「形象的総合」(figurliche Synthesis/synthesis speciosa) (B151, cf. B154) に由来する (cf. B160f)。対象の不在において直観形式の上に対象を描出する能力である構想力 (cf. B151) は、カテゴリリーに従った形象的総合によって、形式的直観としての空間・時間のア・プリオリな表象を可能にする。そして、あらゆる現象はこのア・プリオリな表象に従わねばならない限り、カテゴリリーがそれらすべての現象に妥当することになる (cf. B151)。この議論の要点は、構想力を通じた直観形式への適用において、カテゴリリーは「経験の可能性の制約」(Eind.)であることが明らかにされること、そしてその限りにおいて、制約としてのカテゴリリーの妥当性の証明とその経験的使用への制限とが同時に果たされる、ということにある。したがって、ここで主張される直観形式とカテゴリリーとの一体性において、前者はあくまでも、我々の認識が経験的であることの源としての、受容性の形式に留まる。言い換えれば、感性論の重要な論点であった「直観」性の本質はここでは必要とされておらず、この本質がカテゴリリーとの協働においてどのような意味・役割を持つのかということは、ここではまったく問題にされないのである。こうして演繹論では、感性論の論点・成果が完全には汲み尽くされておらず、それがカテゴリリー使用に対して持つ意味も明らかにされないままである。

第二に、演繹論では、感性的直観とカテゴリリーとの結合の必然性が主張されるものの、実際には、直観はカテゴリリー

にとつて外的なものであり続け、両者はここでは、経験的認識の個別の要素のままに留まる。むしろ演繹論では、直観とカテゴリーの結合や協働の仕組みを明らかにするよりも、感性的制約に対するカテゴリーや悟性の働きの独立性・純粹性を強調することに重きが置かれている (cf. B137, B144, B166, Ann.). B 版 §26 の中盤 (B162-3) の議論について考えてみよう。カントはそこで、「家」や「水の氷結」の知覚を例に出しながら、経験的認識において「量」のカテゴリーや「因果性」カテゴリーが適用されていることを説明する。ところがここでの論点とは、感性的直観やその形式を捨象した後にも、純粹なカテゴリーに従った統一が残るということであり、そうしてカテゴリーが、確かに経験から独立のア・プリオリな制約として、経験的認識の成立に関わっている、ということを示す点にある。したがってカントはここで、「家」の大きさや「氷結」という変化に関する認識の成立が、直観とカテゴリーの協働ということによつていかにして説明されうるかを論じているわけではない。ここでは確かに、直観とカテゴリーの一体性が主題化され強調されているが、しかしその論点はあくまでも、両者が結びつかねばならないという必要性の主張に留まる。つまり、演繹論においては、直観とカテゴリーの結合の仕組みや、その協働が認識においていかにして機能するのかということは明らかにされず、ここでは実際には、二つの要素はバラバラのままである。

さて、これら二つの特徴はいずれも、演繹論において〈為されてないこと〉を示すネガティブな性質のものである。しかし、「超越論的演繹」という議論の本質を捉えるための鍵は、まさにこのような〈限界づけ〉の視点にこそ存する。「経験的演繹」(A85/B117) からは区別されるべき「超越論的演繹」の本領は、「あらゆる経験から完全に独立に」(ibid.)、「完全にア・プリオリに対象に関係する」(A85/B118) ような原理について、認識の可能性の制約としての妥当性を証明する、という点に存する。したがってここでは、ロックが行ったようなカテゴリーの「経験的導出」(B127f.)、言い換えれば、カテゴリーの「感性的化」(sensifizieren) (A271/B327) を退けることが重要な課題になる。つまり、感性的直観とカテゴリーとの結合を具体的に示す前に、まず、両者を敢えて結合させずに純粹な要素のままに

取り出す、しかも、それぞれが本質的に互いを必要とするという要請関係において、そのような要請の状態のままに取り出すという段階が、超越論的分析論の全プロセスのうちで不可欠である。我々は先に、「客観的演繹」の要点を概観した際に、感性的直観が、その多様な表象から客観が構成されるために統覚の統一を必要とする一方、その統覚の側でも、諸表象の「総合を前提または包含」(A118)し、したがってまた、その総合の素材(多様な表象)が外から、つまり直観において与えられることを必要とする、という相互依存の関係を確認した。演繹論はこの相互依存の関係を、感性的直観とカテゴリーにとって本質的なものとして明らかにするが、しかしそのような依存関係が本質的であればあるほど、両者を純粋な原理として取り出しておく段階の重要性は増す。そもそも、「知性的なものと感性的なものとの混淆 (Verwundung)」という「形而上学的誤謬」⁽⁸⁾は、すでに『批判』の十年前にまで遡るカントの問題意識だったのであり、超越論的分析論はそれを踏まえたいうえでなお、それらの原理の融合を示そうとする議論であるのだから、なによりもまず両原理の根源的区別を確立しておくことが、カントにとって吃緊の課題である。そこで、一方において感性論は、感性が単にア・ポステリオリな感覚の能力ではなく、それ自体が純粋直観でもある直観形式として、悟性に並ぶア・プリオリな原理であることを示し、他方において演繹論は、経験に由来しない思惟形式としてのカテゴリーが、そのように純粋な原理でありながら経験的認識に関わりうることを示す。この二つの議論によって、感性和悟性の原理的区別というカントの根本主張に内実が与えられるのである。つまり、演繹論と感性論は、それまで「判明性」という基準によってしか捉えられなかった悟性と感性の区別を、原理としての根源的な違いに帰したうえで、なお且つ、それらが独立したままでは認識を成立させることができないということを主張する、カントの問題提起にはかならない。したがって、哲学史に楔を打ち込むこれらの議論の核心は、二つの原理の融合ではなく、両者の根源的区別と必然的な要請関係を明らかに出すことにこそ存するのである。

さてそこで、カテゴリーの適用問題を、感性的直観とカテゴリーとの結合の「仕方」の問題 („Wie“-Frage)として

理解するならば、演繹論においてはそれはいまだ解決されていないことになる。いま述べたように、演繹論とは、適用において直観と結びつくための素材（カテゴリー）を、可能性の制約としての純粋な起源と、また根源的に直観を必要とするという本質とにおいて提示する議論にほかならない。したがって演繹論の使命とは、一般に理解されているように、適用問題の解決ではなく、カテゴリーと直観が根源的原理として区別されながら本質的に互いを要請し合っている、という問題状況の開示であり、それによって、まさに両者を純粹な原理として統合する論理、すなわち超越論的図式論が必要であることを理解させるための議論にほかならない。言い換えるならば、適用問題をまさに問題として提示することこそ、演繹論の使命が存する。それだから、そこでは直観とカテゴリーが結合されねばならないという必然性が示されるだけで、経験的認識の成立がこの結合によっていかにして説明されるかは明らかにされない。また、感性的直観は、表象が「与えられる」ための形式、という受容性の観点からのみ捉えられ、感性論の論点である「直観」性は本質的な役割をいまだ演じていない。そして我々は、まさにこれらのへ為されてないことの遂行を通じてのみカテゴリーが「実在化」（realisieren）される、という点に、演繹論から区別されるべき図式論の意義を求めることができ。そこで次節からは、図式論における直観とカテゴリーの統合、およびその帰結としての「経験の成立」という観点から、図式論の意義を明らかにしていきたい。

三 図式論における「包摂」問題の意味——カテゴリー使用の特殊性

従来の解釈では、図式論におけるカテゴリーの適用問題は、B版演繹論後半のプログラムと連続的に捉えられ、両者の違いはもっぱら、同じ問題に対する抽象的・一般的議論（演繹論）と具体的・個別的な議論（図式論）として説明されてきた。⁽⁹⁾これに対して本稿は前節において、演繹論における適用問題の意味を見直し、それが解決なのではなく、図式論へ向けての問題提起であるという解釈を示した。我々はこれを踏まえて、演繹論と図式論との根本的な違いを掘り

起こしていききたい。本節ではまず、「超越論的図式」のある重要な特質を際立たせる準備として、カテゴリー使用の事態にそぐわずミスリーディングである、と批判されてきた、図式論前半における「包摂」(Subsumtion) 理論の意味について考察しておく。

図式論の章は、現象に対するカテゴリーの適用はいかにして可能か、という問いを、カテゴリーのもとへの現象の「包摂」というターミノロジーによって提示することから始められる (cf. A137/B176)。そしてまず一般的な概念について、図式の働きに基づく包摂の仕組みが例解され、個別の対象に対して概念が適用されるプロセスが明らかにされる (図式論・第7段落: A140-2/B180-1)。ここでカントが例に出すのは、「三角形」という純粋な感性的概念と、「犬」という経験的な感性的概念である。その説明によれば、これらの概念の基礎にあるのは、個別の三角形や犬の「像」(Bild)ではなく、直観形式の上に構想力によってそれらの像を描出するための規則、すなわち図式である (A140f./B180)。感性的概念はこの図式を媒介として、あれこれの像に結び付けられうる、つまり、個別的な像がそれらの概念のもとに包摂されうることになる。

カントはこのように、バークリーによるロック批判を念頭に置きながら (cf. Guyer [1987] 158f., 163-6)、図式一般の働きを説明する。⁽¹⁰⁾ところがそのまったく同じ段落で、以上の説明がカテゴリーとその「超越論的図式」(A138/B177)には当て嵌まらないことが宣告される。というのは、カテゴリーには、対応するいかなる直観的な像も存在せず、カテゴリーの図式は、いかなる像にもたらされえないからである (A142/B181)。そもそもカテゴリーは、他の感性的概念におけるように、自らのもとに個別の対象を包摂する、という働きのものでは決してない。純粋なカテゴリーは、特定の指示対象を持つことのできない「対象一般の概念」(Begriffe von einem Gegenstande überhaupt) である (B128)。したがって、そのもとに包摂される対象を指摘する仕方での客観的实在性を明らかにすることはできない。カントは別の箇所での事態を、純粋なカテゴリーに対する「実在的定義」(Realdefinition) (A241f., Anm.) の不可能

性として指摘してゐる (cf. A241f.)。このような事情に反してカテゴリーの働きを、図式を介した包摂というモデルによって理解しようとするならば、対象は、カテゴリーに従つた諸表象の総合的統一に先立って成立していることになり、対象の可能性のア・プリオリな制約としてのカテゴリーの妥当性を問うことは不可能となるだろう。カテゴリーとは、そのように出来合いの対象をそのもとに包摂するのではなく、むしろ、対象や出来事を初めてそのようなものとして成り立たせる「可能性の制約」である。

では、なぜカントは、図式論の章を包摂問題によって導入したのだろうか。本稿ではこの問題を解決することはできないが、解釈の一つの可能性として、次の点だけ指摘しておきたい。カテゴリーは概念である限り、その使用に関しては、他の概念と同様に、包摂の仕組みの観点から説明を始めるのが理に適っている。ところがカテゴリーには、その客観的実在性に関して上記のような特殊な事情があるゆえに、この導入には、カテゴリー使用の仕組みを明らかにするというよりは、カテゴリー使用がへ何ではないのかを示す、という意味合いを読み取ることができるといふことができる。つまり、カテゴリーがそこにおけるものとして理解されるべき「可能性の制約」という水準を際立たせるために、へ何ではないのか」ということが理解されねばならず、そしてその正確な理解のためには、何よりもまず、そこから区別されるべき相手の方を正しく捉えておく必要がある。一般的な概念における包摂の仕組みの解明によって図式論を始めることの意味を、本稿ではさしあたり、このように捉えておきたい。

四 超越論的図式における直観とカテゴリーの統合

では、そのように一般的概念の図式からは区別されるべき超越論的図式とはどのようなものか。そしてこれによって、感性的直観との結びつきや客観的実在性はどのように説明されるのだろうか。

図式論における直観とカテゴリーとの関係については、ツシヨッケによる次のような古典的な批判がある。⁽¹⁾

カントに従えば、図式は直観と悟性概念とのあいだの第三のものではなくて、それが、実際にどこに存するのだろうか。それは、……直観と概念の結合そのものより以上でもより以下でもない。時間は直観形式であり、カテゴリーは悟性概念であり、そして図式は、両者の結合以外の何ものでもない。我々が求めていた第三のものに代わり、カントは手短かに、第一のものと第二のものとを統合する。問題は無視されることによってきわめて単純に解決される。カントがはじめに主張したように、直観と概念はまったく異種であるにもかかわらず、カントは両者を、「融合せよ」という大命 (Machtspruch) によって、図式において結合するのである (Zschöcke 169)。

確かにカントは、はじめに超越論的図式を、感性的直観とカテゴリーの媒介者として、両者からは区別された「第三のもの」(ein Drittes) (A138/B177) として導入する。ところが前述のように、カテゴリーは感性的直観にあらかじめ与えられた対象を、図式を介してそのもとに包摂する、という働きのものではない。したがって超越論的図式も、正確には、カントが包摂の説明に沿ってそれを導入した際に性格つけたような媒介者ではないことになる。むしろそれは、まさにツショッケの指摘するとおり、カテゴリーと直観との「融合」の産物以外の何ものでもない。カントがここで提示する超越論的図式の実態とは、構想力が純粹直観形式とカテゴリーから構成して成立させる、「超越論的時間規定」(die transzendentale Zeitbestimmung) (A139/B178) である。しかし、包摂という説明モデルがカテゴリー使用の本質を言い当てるものではないとするならば、媒介となる独立自存の第三者が与えられてない、というツショッケの批判に拘泥する必要もはやない。むしろ問題は、この「融合」の論理がいかにして説明されるか、ということである。

まず、図式論においてカテゴリーと結びつけられる直観の性質について、感性論の基本テーゼを確認しておく。空間・時間の「形而上学的解明」によれば、純粹直観としての空間・時間は、概念とは異なり、様々な空間的・時間的表象を「自らのもとに」含むのではなく、「自らのうち」含むものである (A25/B40)。また、それらの部分的表象は、「一切を包括する唯一の空間」(A25/B39) および「根底に存する唯一の時間」(A32/B48) の制限としてのみ可能であ

り、したがって部分的表象はこのような唯一の全体の構成要素としてそれに先立つのではなく、むしろ部分はその全体によってのみ可能である。アンチノミーにおいてカントは、そのような、部分に先立ちそれを可能にするような全体を、*totum* と呼ぶが (A438/B466)、「感性形式としての空間・時間が純粹直観である」という主張の要点は、「それらがこのような *totum* として、唯一性、連続性、斉一性、無限性を本質とする「与えられた一つの無限量」(A25/B39) である」ということのうちに存する。

さて、このような *totum* として我々の通常的理解から懸け離れた「時間」から、現象について認識される尺度や秩序の形式としての「時間」が成立するには、カテゴリーの論理的機能が必要とされる。つまり、現象のあらゆる時間規定は、純粹直観形式だけによって可能なのではなく、それにカテゴリーが加わることによって、「感性の純粹形式の知性的規定」(Schaper 280) として初めて可能となる。これが、「規則に従ったア・プリアリな時間規定」(A145/B184) としての図式における直観とカテゴリーの統合、という図式論の主張を支える洞察であり、ここで初めて、感性論の成果と演繹論の成果とが「いかにして」結合すべきかが論じられることになる。個々の図式についてごく簡単に確認するならば、「量」のカテゴリーの図式は、同種的な単位の継起的付加を本質とする「数」であり、それによって測定されうる尺度としての斉一的な「時間系列」の理解を可能にする (cf. A142/B182, A145/B184f.)。「実在性」カテゴリーの図式は、内包量としての「度合い」(Grad) を有する実在的性質 (色、熱、力、など) による「時間の充足」であり、感性的直観の質料に基づく連続的な「時間内容」の理解を可能にする (cf. A143/B182f., A145/B184f.)。「関係性」のカテゴリーは、「根底に存する唯一の時間」においてつねに継起的でしかない主観的な表象の連続から、「現象の客観的時間規定としての「恒存性」「継起」「同時存在」という図式を成立させ、唯一の「時間秩序」という理解を可能にする (cf. A144/B183f., A145/B184f.)。最後に、へある何らかの時点における現象の現実存在 (可能性)、へある規定された時点における現象の現実存在 (現実性)、へあらゆる時点における現象の現実存在 (必然性)、という「様相」カ

テゴリーの図式は、「時間総括」(A145/B184f.)、すなわち時間全体のへ見渡しなくしては不可能であり、「与えられた一つの無限量」という純粹直観としての時間の totum 性を前提としている。

以上のように、感性的な純粹直観形式が、感性論において説明されたその本来的な意味においてカテゴリーと共に投入され、両者の働きが超越論的時間規定の確立へと集約されるのが、演繹論とは根本的に区別されるべき図式論の局面である。言い換えれば、感性論と演繹論において、「経験の可能性の制約」として根拠づけられた直観形式とカテゴリーは、この図式論において初めて、協働というその本来的な在り方において提示されるのである。最後に次の節において、図式論が切り開くこの新しい局面の本質が、へ経験の成立」ということに存することを明らかにし、カテゴリーの實在化、またはその客観的實在性ということの意味が、そこで初めて十全に理解されるようになることを示したい。

五 「経験の可能性の制約」から「可能的経験」へ

図式論におけるカントのまとめに従えば、純粹直観形式と統覚の統一に従った構想力の産物である超越論的時間規定(図式)は、「内感における直観のあらゆる多様の統一」(A145/B185)という帰結をもたらし、この統一に従って現象は現象として成立する限り、それらはすべて「一つの経験における汎通的結合」(die durchgängige Verknüpfung in einer Erfahrung) (A146/B185) のもとに与えられることになる。カントは同じことを、「原則の体系」論の直前に、「あらゆる総合判断の最高原則」として定式化する。すなわち、「いかなる対象も、一つの可能的経験における直観の多様の総合的統一の必然的制約のもとに存する」(A158/B197)。このカントの問題意識は、与えられた概念(主語)を超えて、そこで理解されていたとは異なる事柄を述語としてそれに結びつける総合判断においては、その真理性は両者を媒介する「第三のもの」によって支えられねばならない、ということであり (cf. A154f./B193f.)、上記の原則は、この「第三のもの」が「可能的経験」ということによって与えられることを述べている。⁽²⁷⁾そして、超越論的分

析論のプロセスにおいて、この「可能的経験」の地平が切り開かれる局面が図式論にほかならない。

前述のように、現象は、超越論的図式に従って可能である限りにおいて、「一つの経験における汎通的結合」において与えられる。これを認識の観点から言い換えるならば、現象に関する一切の認識は、ア・プリオリな総合判断も含めて、「あらゆる可能的経験の全体」(das Ganze aller möglichen Erfahrung) (A146/B185) のうちに存する、と、いうことになる。このことからカントは、すべての経験的真理に先立ちそれを可能にする「超越論的真理」(transzendente Wahrheit) が、〈可能的経験の全体に対する関係〉ということとして成立すると結論づける (ibid.)。つまり、現象に関する認識の真偽の区別は、その認識がこの可能的全体のうちに整合的に位置づけられうるか否か、という区別として説明されることになるのである。こうして我々は図式論において、「経験的認識」すなわち「経験」の成立に立ち会う。この「経験」とは、知覚の単なる主観的表象ではなく、それからは区別されるべき、客観的な現象とその秩序の認識である。そして、もしカテゴリーが、「経験の可能性の制約」として客観的実在性を認められるはずのものであるならば、それは、その経験的認識がまさに認識として、つまりその真理性を問うる認識として成立するこの図式論においてのことでなければならぬ。

図式論における〈経験の成立〉によって初めてその客観的実在性が主張されうるようになるということは、カテゴリーだけに当て嵌まることではなく、空間・時間の直観形式についても同様に理解されねばならない。つまり、経験的真理の基礎が与えられ、主観的な表象から区別されるべき現象とその客観的認識の成立が認められて初めて、カテゴリーや空間・時間は、超越論的な観点における単なる「可能性の制約」という理解を超えて、客観性の地平としての経験の観点から、事物について認識される秩序や述語規定として、つまりアリストテレス的な意味における「カテゴリー」として、現象のうちに実在化されると言いうるようになる。そして特にカテゴリーについて言えば、判断の論理的機能から導出されたこれらの概念は、図式論において経験の地平が切り開かれ、経験の側、客観の側から語られうるようになる。

つてようやく、言葉の本来的な（アリストテレス的な）意味を取り戻す⁽¹⁴⁾。カントの言葉に従って言えば、ここでカテゴリーは、「現象的量」(*quantitas phaenomenon*)、¹⁵「現象的實在性」(*realitas phaenomenon*)、¹⁶「現象的実体」(*substantia phaenomenon*)、¹⁷「現象的必然性」(*necessitas phaenomenon*) などとして捉えられるようになるのである (cf. A146/B186)。ここに、カテゴリーや空間・時間の客観的實在性ということが、その十全な意味において理解されることになる。これは言い換えれば、単なる超越論的觀念論の立場から、¹⁸超越論的觀念論が同時に經驗的實在論でもある¹⁹と主張しうる立場へと移行した、ということにはかならない。そしてこのことは、感性論においても演繹論においてもなく、両者の成果が「あらゆる可能的經驗の全体」へと、したがって「超越論的真理」へと収斂し、²⁰經驗の成立²¹が見届けられる図式論において、ようやく成し遂げられるのである。

以上のように、超越論的時間規定のもとでの純粹直観形式とカテゴリーの統合、という図式論のテーゼの帰趨は、あらゆる經驗的真理の究極の基礎としての「超越論的真理」の確立であり、これによって説明される經驗の成立こそが、図式論の到達点である。そしてその究極の基礎とは、超越論的統覚にはなく、²²可能的經驗の全体²³ということに求められねばならない。そもそも超越論的分析論が目指していたのは、単に「經驗の可能性の制約」にまで遡ることではなく、そこから下って經驗の成立を説明することである。そしてもちろん、經驗的認識を含めた「あらゆる総合判断」を構築するための原理を個別に基礎づけるのは、「原則の体系」論の課題である。しかし、単なる「可能性の制約」だったものが經驗の側から語られるための局面の転換を成し遂げ、カテゴリーや空間・時間がある²⁴において實在化されるべき客観性の地平を切り開くのは、図式論である。つまり、図式論においてようやく我々は、直観形式やカテゴリーの客観的實在性²⁵ということを真に主張し理解しうる段階に達するのである。

結 論

超越論的演繹論が、「である」問題 (, Daß-Frage) と「いかんして」問題 (, Wie-Frage) とらう二種類の議論を含んでいること、そして、適用の問題である後者が図式論においても問われていることから、演繹論と図式論の課題の根本的な違いが覆い隠され、両者は単に、同じ問いに対する一般的・抽象的な議論と個別的・具体的な議論、という扱ひ方の違いとしてのみ捉えられてきた。これに対して我々は、〈何が為されてないのか〉という演繹論の限界に着目する解釈によって、適用に関するその課題について、次のような理解に達した。すなわち、演繹論は、感性的直観とカテゴリーとの相互的な要請関係を掘り起こすことによって、適用の問題をまさに問題として成り立たせているカテゴリーの本質、すなわち、「経験の可能性の制約」であるという本質を明らかにする議論にはかならない。そしてこれを受けて図式論において初めて、もう一方の「可能性の制約」である純粹直観形式が、感性論において論じられた本質のものとして取り入れられ、超越論的図式におけるカテゴリーと直観の協働の原理が明らかにされる。そしてこの統合の帰趨は、あらゆる現象の、「一つの経験における汎通的結合」にあり、そうして構成される「あらゆる可能的経験の全体」のうちに、経験的認識の真理性の基礎が見出される。こうして図式論において経験の次元が切り開かれることによって初めて、超越論的な観点から「経験の可能性の制約」として導き出されたカテゴリーは、経験の側から、「可能的経験」のうちへの実在化について語られうるようになる。つまり、カテゴリーの客観的実在性の問題は、図式論において経験の視点に立つことができるようになってようやく、解決の土台へともたらされるのである。

注

*『純粹理性批判』からの引用は、原版の頁番号によって引用箇所を示した。その際、Aは第一版を、Bは第二版を表す。その他のカントの著作については、アカデミー版カント全集の巻数(ローマ数字)と頁番号(アラビア数字)によって引用箇所を示した。引用中の「」は、筆者による補足を表す。

- (1) 「我々が悟性と呼ぶ能力の究明のために、そして同時に、その悟性使用の規則と限界の規定のために行われた探求として、私
が超越論的分析論の第二章において、純粹悟性概念の演繹という表題のもとに行った探求ほど重要なものを、私は知らなう」(A
XVII)。
- (2) Cf. Wolfgang DETEL, „Zur Funktion des Schematismuskapitels in Kants Kritik der reinen Vernunft“, in *Kant-Studien*
69 (1978): 17-45, u. a. S.36.
- (3) Cf. Dieter HENRICH, “The Proof-Structure of Kant’s Transcendental Deduction”, in *The Review of Metaphysics* 22
(1969): 640-59.
- (4) たゞそはフリンンは「客観的妥当性」と「客観的実在性」の区別に着目し、第一段階が前者を、第二段階が後
者を扱ふことの意味のちやを述べた (cf. Henry F. ALLISON, *Kant’s Transcendental Idealism—An Interpretation and Defense*,
New Haven: Yale University Press, 1983, pp.134-5)。他方、ハヤマンはフリンンの解釈に共感を示し、「ゆゑに」註明
(„Daß“-Beweis) と「ふまじく」註明 („Wie“-Beweis) の区別に対応ややうに二段階構成を理解しようとす (cf. Peter
BAUMANN, *Kants Philosophie der Erkenntnis—Durchgehender Kommentar zu den Hauptbegriffen der „Kritik der reinen
Vernunft“*, Würzburg: Verlag Königshausen & Neumann GmbH, 1997, S.419; H. J. PATON, *Kant’s Metaphysic of Experience
—A Commentary on the First Half of the Kritik der reinen Vernunft*, in two volumes, vol.1, 1961 (1st ed. 1936), p.529)。
- (5) Cf. Allison, *op. cit.*, pp.133-72; Baumann, *op. cit.*, S.419-38; Detel, *op. cit.*, S.35-7; Graham BIRD, *The Revolutionary Kant
—A Commentary on the Critique of Pure Reason*, Chicago: Open Court Publishing Company, 2006, pp.322-24. ホバーナーは
この区別が区別たるより主体を規定しようとす (cf. Paul GUYER, “The Transcendental Deduction of the Categories”, in *The
Cambridge Companion to Kant*, ed. Paul Guyer, Cambridge: Cambridge University Press, 1992: 123-60, esp. p.160, note 32)。
- (6) マチヤヌスはマッスナーのこの研究書によつて、図式論の体系的意義と特定の認識を区別しようとす (Erich ADICKES,
Immanuel Kants Kritik der reinen Vernunft—Mit einer Einleitung und Anmerkungen, hg. von E. Adickes, Berlin: Mayer
& Müller, 1889, S.171; Ernst Robert CURTIUS, „Das Schematismuskapitel in der Kritik der reinen Vernunft“, in *Kant-
Studien* 19 (1914): 338-366, u. a. S.362f.)。これは按じると、後「シムルン」チャンマン「ダーラム」フロイト「ロ
ーター」などによつて図式論の認識を説き及ぼすとす (cf. Eva SCHAPPER, “Kant’s Schematism Reconsidered”, in *The Review of*

Metaphysics 18 (1964): 267-92; Lauchlan CHIPMAN, "Kant's Categories and their Schematism", in *Kant-Studien* 63 (1972): 36-50; Daniel O. DAHLSTROM, "Transzendentaler Schemata, Kategorien und Erkenntnisarten", in *Kant-Studien* 75 (1984): 38-54; Léo FREULER, "Schematismus und Deduktion in Kants Kritik der reinen Vernunft", in *Kant-Studien* 82 (1991): 397-413; Dieter LOHMAR, "Kants Schemata als Anwendungsbedingungen von Kategorien auf Anschauungen: Zum Begriff der Gleichartigkeit im Schematismuskapitel der *Kritik der reinen Vernunft*", in *Zeitschrift für philosophische Forschung* 45 (1991), I: 77-92)。それぞれが基本的な立場として、それぞれを参照。

(7) 「哲観と我々の思考の互依性」(cf. Martin HEIDEGGER, *Kant und das Problem der Metaphysik*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1998 (1. Auflage, 1929/34), S.58)。

(8) Cf. *De mundi sensibilibus atque intelligibilibus forma et principis*, § 24 (II412)。

(9) Cf. Baumann, *op. cit.*, S.436; Bird, *op. cit.*, p.323f.; Chipman, *op. cit.*, p.38f.; Gregg E. FRANZWA, "Space and the Schematism", in *Kant-Studien* 69 (1978): 149-59, esp. p.150; Paul GUYER, *Kant and the Claim of Knowledge*, Cambridge: Cambridge University Press, 1987, p.158. その外、演繹論と図式論の境を「*イデア*」証明と「*イデア*」証明の境と「*イデア*」(welch) カテゴリーが適用されるべきかという問題との違いとみなす解釈(フロイラー、ローマー)や「*イデア*」学の基礎づけと経験の基礎づけの区別として捉える解釈(シムハイバー)などがある(注6参照)。

(10) ハークリーとの関係については、フョロネンコの図式論研究が重要である(cf. A・フョロネンコ「超越論的図式論の読み」『カンチ研究』(中村博雄 訳)、東海大学出版会、1993: 15-45)。フョロネンコは「図式論の意味を、独断的経験論という「敵地」における演繹論の成果の「検証」である」と捉えている(p. 22)。

(11) Cf. Walter ZSCHOCKE, "Über Kants Lehre vom Schematismus der reinen Vernunft", in *Kant-Studien* 12 (1907): 157-212.

(12) 各図式の意味・働きとその根拠付けの詳細な議論については、やはり「原則の体系」論を俟たねばならない。また、本稿では空間との関係を論ずることができなかったが、ここで一点だけ述べたおくと、空間的直観形式については、「同時存在」の図式したがってまた、「経験の類推」(第三類推)との関係にとくに注意する必要がある。「自然の統一」(Naturinheit) (A216/

B363) の論証を旨とする「経験の類推」の中でも、客観的時間秩序としての「同時存在」を根拠づける第三類推の議論は、「統一された唯一の全体」としての空間とどう結論へと帰着する (cf. Margaret MORRISON, "Community and Coexistence: Kant's Third Analogy of Experience", in *Kant-Studien* 89 (1998): 257-77, esp. p.266)。もこのことが認められるならば、カテゴリーの図式化における、「一切を包括する唯一の空間」(A25/B39) という純粹直観形式の関与の仕方が考察されねばならないだろう。(13) 「……純粹な総合判断は、たとえただ間接的にであっても、自らを可能的経験に関係づけ、あるいはむしろ、その可能性そのものを、可能的経験に関係づける。そしてこの純粹な総合判断は、その総合の客観的妥当性を、可能的経験のうえに基礎づけるのである」(A157/B196)。

(14) 「超越論的図式論において初めて、カテゴリーはカテゴリーとして形成される」(Heidegger 110)。

[付記] 本稿は、文部科学省・科学研究費補助金による研究成果の一部である。

(筆者 おさだ・くらんど 日本学術振興会特別研究員(神戸大学)／哲学史)

Von den „Bedingungen der Möglichkeit der Erfahrung“
zu der „möglichen Erfahrung“
— Deduktion und Schematismus in Kants
Kritik der reinen Vernunft —

Kurando OSADA

Forschungsstipendiat der Japanischen Gesellschaft
für die Förderung der Wissenschaft

Im vorliegenden Aufsatz wird versucht, die Grenze der Leistung der transzendentalen Deduktion der Kategorien in Kants *Kritik der reinen Vernunft* genau zu bestimmen, und dadurch die eigentliche Bedeutung des Schematismuskapitels einsehen zu lassen.

Die Deduktion enthält zwei verschiedene Argumente über das Problem der „objektiven Realität“ der Kategorien; das erste betrifft die „Dass“-Frage, und das andere die „Wie“-Frage. Nun ist die letztere das Anwendungsproblem der Kategorien, das auch die Hauptfrage des Schematismuskapitels ist. Also ist der gründliche Unterschied zwischen beiden Kapitel über das Anwendungsproblem versteckt worden, so dass die Deduktion und der Schematismus, Interpreten nach, sich nur als die allgemeine, abstrakte Behandlung und die einzelne, konkrete von demselben Problem unterscheiden können.

Dagegen in dieser Aufsatz stellt es sich heraus, dass die Behandlung des Anwendungsproblems in der Deduktion nicht die gründliche Entscheidung desselben ist, sondern erläutert sie vielmehr die Notwendigkeit der solchen Entscheidung über die Art der Verbindung der sinnlichen Anschauung und der Kategorien, indem sie ihre wesentliche Dependenz von einander aufdeckt, und dadurch die Natur der Kategorien als „Bedingungen der Möglichkeit der Erfahrung“ darstellt. Daher fügen die Anschauungsformen, als erklärt in der transzendentalen Ästhetik, und die Kategorien sich noch nicht in der Deduktion zusammen, und eher bleiben sie dort als zwei isolierte Elemente a priori der empirischen Erkenntnis.

Nun erörtert das Schematismuskapitel, aufgrund von der Problemsstellung in der Deduktion, erst die Prinzipien des Zusammenfügens jener zwei Elemente, und solche Prinzipien sind die transzendentalen Schemata. Diese Schemata dann bringen „das Ganze aller möglichen Erfahrung“ hervor, in dessen Beziehung „die transzendentalen Wahrheit“ aller empirischen Erkenntnisse besteht. Folglich, nur

nachdem der Horizont der „möglichen Erfahrung“ auf solche Weise in dem Schematismuskapitel sich eröffnet, so lassen die Kategorien sich in dieser Erfahrung „realisieren“. Mit anderen Worten, ist es erst in dem Schematismuskapitel, dass das Problem der objektiven Realität der Kategorien in eigentlichem Sinne aufgelöst wird.

Peirce's Critical Common-Sensism

by

Takashi SASAKI

Part-time Lecturer, Doshisha High School

Peirce presented his epistemological fallibilism as a criticism of Cartesian foundationalism. He rejected not only foundationalism but also naturalism. I will argue that his later claim “critical common-sensism” plays an important role to make his non-foundationalistic and non-naturalistic epistemological alternative possible. The most difficult drawback to his project is how it can overcome the infinite regress problem. His critical common-sensism suggests that our epistemological enterprise, as long as it is an inquiry which is carried out by a human being, always has limits. Those limits are essentially indubitable common-sense beliefs, and they are not subjects to reflective rational self-control. This means that his epistemological project takes account of such a limited human ability and can avoid the infinite regress problem by setting up those limits. We recognize that his epistemological alternative is established as a consistent consequence of his fallibilism which is his fundamental claim about human knowledge.